

カーネーションの栽植様式に関する試験

第2報 1番花の採花節位が2番花の収量に及ぼす影響

田中政信・田中 誠 (佐賀県農業試験場)

TANAKA, M. and M. TANAKA : Studies on the Planting Method of Carnation. 2 Influence of the Cut Position of First Flower on the Yield of Second Flower

北部九州におけるカーネーション栽培は冬期間の日照不足が切花収量の減少や品質の低下をもたらしている。その対策として受光態勢を考慮した栽植様式について検討し、第1報では栽植様式別に摘心方法や採花節位を変え、それぞれが2番花の収量におよぼす影響が大きいことを確認した。本報では再度6条植えについて1番花の採花節位と2番花の収量構成について検討したので報告する。

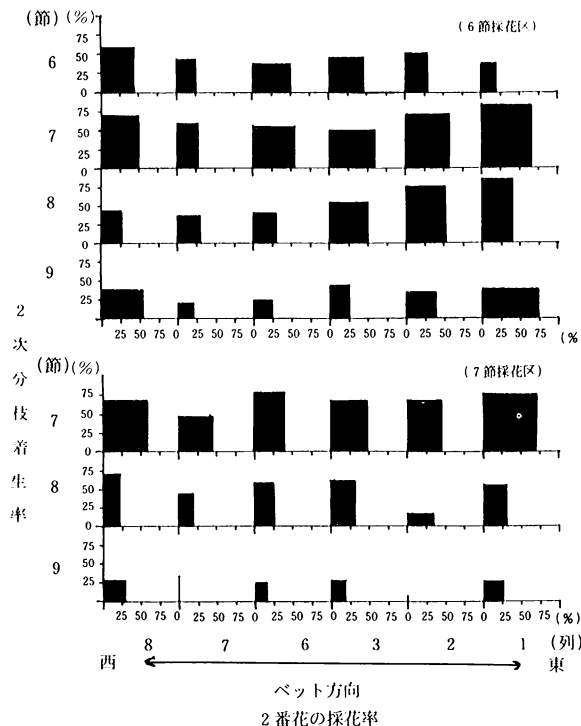
材料及び方法

供試品種は“スケニア”を用い、1981年6月29日に砂上げ苗を株間10cm, 条間20cm, 1条6株を南北方向に配置したベッドに定植した。供試株数は1区30株, 2区制とした。摘心は7月24日に一斉に実施した。冬期間の最低夜温は8℃に保ち, 日中は自然換気とした。処理区は1番花の採花節位を上位節から数えて1) 6節採花区, 2) 7節採花区,

3) 8節採花区, 4) 9節採花区の4区を設けた。なお試験は1982年6月10日まで実施した。

結果及び考察

12~3月に採花した1番花の各節位における2次分枝の着生率及び採花率について調査した結果, 6節採花区は7節目に最も多く, 2次分枝の着生がみられ, 次いで8節目, 6節目, 9節目の順となった。またこの2次分枝の採花率は7節目と8節目が高く, 40~60%であり, 次いで6節目の25~40%, 9節目の18~45%であった。他の処理区の2次分枝の着生率, 採花率も6節採花区と同様な傾向にあった。採花節位別の切花収量についてみると, 6節採花区で10本/株, 7節採花区で8.9本/株, 8節採花区で7.2本/株, 9節採花区で6.1本/株と上節位の採花区ほど多くなった。また, 株当たりの切花本数を1番花と2番花に分けてみた場合, 1番花はいずれの区でも, 栽植部位に関係なく5~6本採花されており, 採花節位間の収量差は2番花の収量差であった。栽植部位別の収量構成はベッドの外側(1列, 8列)がいずれの区も多く, 受光量の少ない2列目と7列目が少なくなる傾向にあった。内側(3列, 6列)は両者の中間の値であった。またベッドの東半分が西半分より多くなった。月別の収量は定植が遅く, 1回摘心のため4~5月の採花数が他の区に比べ約1.5~4倍と多くなり, この時期の採花数が株当たりの切花収量を決定した。



第1図 12~3月に採花した1番花の各節位における2次分枝の着生率と2番花の採花率

第1表 採花節位別の切花収量構成

		栽植部位						総本数 (本/株)
		8	7	6	3	2	1	
6節採花区	一番花	5.7	5.3	5.1	6.0	5.4	6.1	301 (10.0)
	二番花	5.0	3.6	4.6	4.5	3.7	5.2	
	総数	10.7	8.9	9.7	10.5	9.1	11.3	
7節採花区	一番花	6.0	4.9	5.3	5.8	5.4	5.7	269 (8.9)
	二番花	4.4	2.4	3.4	3.3	2.5	4.6	
	総数	10.4	7.3	8.7	9.1	7.9	10.3	
8節採花区	一番花	5.7	4.9	5.0	5.1	5.1	4.9	216 (7.2)
	二番花	2.4	1.6	1.3	2.2	1.7	3.4	
	総数	8.1	6.5	6.3	7.3	6.8	8.3	
9節採花区	一番花	5.0	4.8	5.3	4.9	5.6	5.3	184 (6.1)
	二番花	1.4	0.9	0.8	1.0	0.6	0.9	
	総数	6.4	5.7	6.1	5.9	6.2	6.2	